令和３年度第１回千葉県がん教育推進協議会	参考資料2
令和3年9月10日	

令和２年度千葉県がん教育推進協議会議事録

１　日　　時　令和２年９月１８日（金）　午後５時００分から午後６時５０分

２　場　　所　ＷＥＢ会議（Ｚｏｏｍ）

３　出席委員

横手委員、飯笹委員、五十嵐委員、野田委員、細井委員、濱詰委員、田端委員、加藤委員、桒原委員、若梅委員

４　議　　題

（１）会長・副会長の選出について

（２）がん教育について

（３）がん教育の実施状況について

（４）千葉県がん対策推進計画の中間評価について

（５）今後の活動の方向性

（６）その他

（７）意見交換

５　議事内容

議題（１）　会長・副会長の選出について

【互選により、横手委員が会長に就任】

【横手会長の指名により、五十嵐委員が副会長に就任】

議題（２）　がん教育について

議題（３）　がん教育の実施状況について

議題（４）　千葉県がん対策推進計画の中間評価について

【事務局より資料１－１、１－２、２－１、２－２、３に基づき説明】

○横手会長

議題２・３・４で、がん教育及び当協議会の背景、新学習指導要領の説明、外部講師の派遣、文部科学省及び千葉県教育庁の取組、中間評価の報告について説明があった。

事務局に質問だが、健康づくり支援課の制度を活用した外部講師派遣が５件から２７件に増加している点について、県内の全学校の何パーセントに当たるか。全体からすると、まだ数が少ないと考えてよろしいか。

○事務局

千葉県内の公立学校については、小中高と合わせて約１２００校存在する。

そのうちの２７校が、外部講師派遣制度を活用したことになる。

○横手会長

また、外部講師を呼んでいなくても、自分たちで何らかのがんの教育をしている学校が、半数以上ということか。

○事務局

そのとおりである。

○横手会長

外部講師の活用について現場の声として、田端委員から取り組まれている点や制約などをお聞かせ願いたい。

○田端委員

自分で授業しているので、外部講師を活用したことはない。ただ、外部講師を活用した学校からは非常に良かったと聞く。活用していない学校については、どのような話をしてもらえるのか、児童・生徒に即した内容になっているのか見えてこないと、頼みづらいという声がある。少しずつ実践が増えると、その情報が多くの養護教諭に共有されて、外部講師の活用が今後増えていくのではないか。

○横手会長

重要な意見である。様々なテーマで外部講師を派遣している実績について事務局から説明があったが、その内容までは見えてこない。話の面白い先生、専門を述べられる先生など様々だが、実際の状況が見えてくると教育現場が外部講師をより活用できるようになると思う。それに伴い、量だけではなく、質の問題も解決できる。どのような講師を派遣できるか等について事務局から現場に説明できることはあるか。

○事務局

指摘のとおり外部講師の活用が十分でないのは事実かと思う。

教育委員会からの周知・普及も十分ではないと思っている。

がん教育は学習指導要領に正式に載ったので、授業実践研修会も含めて周知をより一層行い、外部講師がどのようなお話をできるのかできる限り詳細に伝えていきたい。

○横手会長

顔の見える講師像があると教育現場が外部講師を呼びやすくなり、外部講師を有効活用できると思う。

○栗原委員

保健の授業では、生活習慣病等を含めて、がんに関する授業を行うことがある。昨年度、養護教諭から外部講師の依頼について意見もあったが、授業の時間数や生徒の実態から学校によっては厳しいところもある。現在勤務している学校の実態では、教科書の内容を行うことで一杯一杯である。外部講師からの指導は充実していると思うが、学校によって差が出てしまう。

○横手会長

忙しい学校現場で外部講師を呼ぶには、時間的余裕やエキストラのエネルギーを要する。そこが外部講師を２７件よりも増やしていくときの壁になる。増えることに対する阻害因子を見極めることが重要である。

○濱詰委員

実際に保護者の立場で子供やＰＴＡの仲間と話していると、ＳＮＳなどの話題は多いが、がん教育について話題になることは少ない。千葉県ががん教育に取組んでいることはよく分かったのだが、それが現場にフィードバックされているかは難しい。県内のＰＴＡにも研究大会があり、小中学校だけでも約１０００校ある。そこでの話題に、がん教育を入れることも意味がある。

また、千葉県教育庁では１０００カ所ミニ集会という取組があるので、そのような場で教育庁からがん教育について周知すると話題のきっかけになる。いろいろと声を掛けて、話題にあげていくことが重要である。

教員の負担は保護者から見ても大きいので、外部講師を積極的に活用してほしい。また、保護者の中にも医師や看護師がおり、ＡＥＤの使い方などを各学校で講義することもある。現場の先生に頼るだけではなく、地域の方や保護者を頼るのも１つの方法である。

○横手会長

学校の先生にこれ以上負荷をかけることなく、現場に必要な知識を届けるための工夫をできるのではないか。キーワードは顔の見える情報のやりとりだと思う。

○野田委員

千葉県で活動しているがん患者においても、外部講師のｅラーニングを受けるなど準備を整えてお待ちしているところである。事務局からの報告で、派遣実績が２７件とのことだったが、外部講師の内訳を見たところ、医療関係者がほとんどである。がん患者への理解と共生も、がん教育の重要事項と位置付けられているので、がん体験者も外部講師として是非活用願いたい。

現場の負担やコロナの状況等でがん教育に割ける時間がないことも見聞きしているが、オンラインを使ってでも外部講師を活用して、がん教育を続けているところもあるので、そのような点も含めてがん体験者をより活用してほしい。

○横手会長

講師としてのリソースは豊富にあると思う。

例えば、簡単な５分・１０分の患者や医師などの話をＹｏｕＴｕｂｅなどにあげて、

授業の合間に見ることもできる。数値目標を設けて数を増やすだけではなく、少しの工夫次第で息づいた教育ができるのではないか。

〇野田委員

参考資料２－２のアンケートを見ていると、「がんについての正しい理解や知識が身に付いた」や、「がん患者への配慮をしていきたい」などの感想があったが、「がんは予防できる」や「生活習慣の悪い人ががんになる」等の間違ってはいないが、必ずしも正確ではない理解をしている生徒もいる。生活習慣が良くてもがんになる人がいることや、がん患者の思いを伝えていかないと、「がんになった人は生活習慣が悪かった人」という誤解が広まりかねない。また、家族にがん患者のいる子供が傷つくこともあるので、予防・検診だけでなく、がんへの正しい理解についての深い内容まで伝わるがん教育になってもらいたい。

〇横手会長

誤解や偏見などの二次的被害や、ちょっとした言葉で傷つけてしまうこともある。患者と医療者がペアになって講演するのも良いと思った。

〇飯笹委員

昨年は高校で、今年は小学校で外部講師としてがん教育を実施した。

我々としては、学校教育から離れているため、その学年の子供がどれくらいの知識レベルにあるのか分からないので、その点を整理して共通の基本的なスライドを作ってもらいたい。基本的なことはスライドでおさえておいて、医療現場での自分の体験談などを語れると外部講師の意味が出る。また、ＹｏｕＴｕｂｅなどで予習したうえで外部講師の授業に参加してもらえると非常に分かりやすいと思う。学校教育と医療現場のギャップを埋めてくれるものがあるといい。

〇横手会長

聞き手が求めている情報と外部講師が提供する情報の乖離やズレもあるだろうし、飯笹委員が言うように、基本的な教材を使いながら、それぞれの講師の得意分野が話せるようになると素晴らしい。講師と聞き手の間をマッチングすることを県で行えると他県にも

勝るものが千葉県でできると思う。

〇五十嵐委員

全国がん患者団体連合会には、外部講師のためのｅラーニング講座がある。現在受講中だが、政府の方針や外部講師に求められることなどがコンパクトにまとまっている。ｅラーニングには、実際に外部講師を担っているがん患者会からの講義もあり、事前の打合せを重要視しているとのことだった。クラス又は家族の中にがん患者がいるか把握することは大事なので、事前の打合せは絶対に必要である。

ｅラーニングでは、講義と試験を受けて合格すると、受講証明書が出る。患者だけではなく、医療者や教員にも参考にしていただきたい。どのレベルに合わせていけばいいかの基準になると思う。

〇横手会長

そういうものを千葉県にも導入して、外部講師の質をコントロールするのはどうか。

〇事務局

ｅラーニングも新しく取り組んでいく必要のある１つの分野であると思う。すぐに取り入れられるかは検討しなければならないが、今後の参考にさせていただきたい。

〇横手会長

最初から全て素晴らしいものは大変だが、１つずつ取り入れていくと良いと思う。

五十嵐委員が言っていた打合せについても、ＷＥＢ会議で５分・１０分でできるので、コロナの大変な時期を逆手にとって、前進できるといい。

〇若梅委員

市内の小・中学校に外部講師として赴いている。日頃から、学校の先生方と顔を交えていろいろな話をできる関係がすでに構築できており、それを踏まえて授業に入っている。

外部講師としては今年で３年目だが、１年目は事前打ち合わせや、やりとりに時間がかかった。２年目では内容の質の問題まで話が進んだが、今年はコロナの影響で全面中止になった。学校との関係が近いということだけでも、スムーズに進む要因になると実感して

いる。

昨年、特別支援学校で初めて実施したが、通常校と状況が違った。高等部の生徒を対象にしたが、１つ１つのテーマごとにかける打合せの時間が膨大であった。テーマ１つをとっても、その話を聞くと、その生徒はパニックを起こすかもしれないというような、とても繊細な打合せになった。実施してみると、先生たちの協力もあり、保護者にも事前・事後に資料を提示し、話も聞いてもらい、生徒たちにとって貴重な時間として捉えてもらえたと思う。

児童・生徒に「がん検診を受けましょう」と言える機会があるのは、あのとき学校でこんな話を聞いたというのを少しでも記憶してもらい、対象年齢になったらがん検診を受診してもらいたいという点で、市としては非常に意義を感じている。また、授業に対する生徒の反応も良く、自宅に帰ってから保護者に「検診受けてる？」や「検診受けてね」と言ってくれるので、外部講師として行った効果が出ていると感じている。

〇横手会長

子供の頃に学校で聞いたことは、心に残っている。親にも良い影響があるのは素晴らしい。また、まず始めてみることが大事だと思う。

議題（５）　今後の方向性

【事務局より資料４に基づき説明】

〇横手会長

質問や意見あるか。

〇細井委員

全体的な話になるが、学習指導要領では、やや予防に偏った内容になってしまっている。どうしても生活習慣ばかりになってしまうと、がんに罹患した人が予防を怠った、又は間違った予防をしてしまったと捉えられがちである。予防した上で、どうやって病気と共生していくかまで踏み込んで話していけると非常にいい。

また、がんに特化したものではないが、平成２８年度から「まちっこプロジェクト」と

して、松戸市医師会と市教育委員会が連携して市内の小・中学校に出前授業を行っている。その中に、がんも入っており、がんの細かい説明よりも病気があっても在宅で生活してもらうために医師会が支援していること等を話している。それを家に持ち帰ってもらって、保護者に伝え、保護者がコミュニティーで考えるという、Child to Community の考え方に基づいて出前授業を実施している。

〇加藤委員

学校の中でも養護教諭と協力しながら各行事は行われており、行事で体験したことや医療関係者から聞いたことは、とても貴重な体験になっている。薬物乱用防止教室等は多くの学校で実施しているので、例えば隔年での実施提案などができれば、多くの学校ががん教育を実施するチャンスはある。

また、いろいろな団体で毎月１回１００人ほど教員が集まって、授業研究や発表等をしている。その場で、がん教育のモデル授業を実施する日時と場所を周知すれば、千葉市の場合であれば１回の周知で、ほぼ全ての学校の保健体育科の教員に情報が流れる。

千葉県小中学校体育連盟でも研究部があり、各市町村から保健体育科の代表教員が集まり、毎年保健体育の研究主題を決めて、全県で取り組んでいくものを冊子化する取組をしている。その取組等とリンクできると、全ての保健体育科の教員に資料が行き渡るので、周知する機会はたくさんある。

〇横手会長

今ある仕組みをうまく活用すれば、それをがん教育にも転用できるのではないかということである。事務局としても意見をプランに取り入れて、実行性のある教育プランを進めてもらいたい。

例えば、児童生徒向けアンケートを授業前後で実施しても一部の結果が補強されるだけで、新しいものが出てくるとは思い難い。それよりも今ある外部講師や教員の仕組み、それを求めている人たちをうまく繋ぎ合わせて有効な教育プランに結び付けていけると素晴らしい。

〇横手会長

研修会の概要は決まっているか。過去の実績等あるか。

○事務局

例えば、令和２年１月に文部科学省が開催した外部講師向けの研修会を参考にしたいと考えている。具体的には本日の議題２で取り上げた、がん教育に係る法律や計画、学習指導要領における、がん教育の位置付け等の授業実施の前提となる基本的なことから、学校の担当教員との打合せの重要性や、授業対象の生徒の発達段階に合わせた構成にするなどの留意事項をレクチャーする必要があると考えている。また、外部講師と、外部講師を活用する学校が懸念しているであろう、授業を行う上での配慮事項についても取り上げる必要があるとも考えている。そして基本的な事項を講義で学んだ後に、実践例なども示していきたい。

○横手会長

次回の協議会で、おおよその内容が出てくるのか。

○事務局

次回の協議会で事務局から研修会の案を提示し、委員の意見を踏まえて修正していく予定である。

○横手会長

五十嵐委員の言っていた完成度の高いｅラーニングの導入や、飯笹委員から発言のあった共通した基本教材を提示して、外部講師の体験談を付与していく等すれば非常に魅力的なものになると思う。どのような先生がいるか、現場にうまく情報提供してマッチングしていければ、今ある内容でより活用できる。

○濱詰委員

どれくらいまでの実施校数を目指して、がん教育の目標値を設定しているのか。

○事務局

外部講師の活用件数については、学校によっては外部講師を活用しないで、担当教員ががん教育を行うこともあるので、令和５年度までの具体的な数値目標は敢えて示していない。

また、がん教育全体の実施校数の目標値については、現時点で具体的な目標値は設定していないが、中学校及び高等学校では学習指導要領に明記されたので、今後、学校や教員の意識も高まっていく。可能な限り実施校が増えていくように努める。

〇横手会長

具体的な数字がないとするなら、１００％を目指すということだと思う。まだ実施していないところはできるだけ全ての学校で実施する、既に実施している学校については、その内容をより高めてもらえるようにするということだと思う。もし、仮にそうするのであれば、アンケートでも、なぜがん教育をできないのか、なぜ外部講師を呼べないのかなどを集めて、何が壁で、何を解決すれば目標を達成できるのか方向性を変えていった方が、目指しているものを達成できると思う。本日、素晴らしい意見がたくさん出たので、事務局でフィードバックして、次回改めて提示いただきたい。

議題（６）　その他

〇事務局

当協議会の委員構成について皆様から意見をいただきたい。

当協議会は議題（２）で説明したとおり、議題に合わせて委員を柔軟に選ぶことができる。そこで、今後の会議に向けて委員名簿に加えた方がいい、立場の方や団体等があれば、この場で御意見を頂戴し、次回以降の参考にしたい。

〇横手会長

意見等あるか。

〇五十嵐委員

特に意見はない。網羅されていると思う。

〇濱詰委員

小学校の先生はどうか。

小学校の先生の現場の話等は、ここの委員で把握できるのか。

○事務局

本日は欠席であるが、千葉県保健主事会長の近藤委員が小学校の教頭であるので、小学校の実情については近藤委員から聞ける。

○野田委員

がん教育の先行事例として鹿児島県があるが、小・中・高で延べ１８０校、生徒数では約３万人に対して「命の授業」ということでがん教育を続けている先進県になる。研修のプログラムも持っており、学校の先生ががん教育をするためのスライドも作っており、様々な教材やノウハウも持っている。それを条件次第では貸出できるので、千葉県で何もかもゼロから作っていくのではなく、使えるものは使っていった方が良いのではないか。

今後、事務局で研修会のたたき台を作るようだが、ワーキンググループのようなものを作る予定はあるか。

○事務局

ワーキンググループを作るということは考えていなかったが、作るかどうかも含めて検討したい。

○野田委員

モデル授業を今年も３校で実施するということだが、それは見学可能か。

○事務局

今年度は新型コロナの影響もあり、見学者をなるべく少なくしたいと考えているので、見学は控えていただけるとありがたい。来年度については新型コロナの状況次第ではあるが、学校の事情等の条件が整えば、不可能ではないと思われる。

○横手会長

先進県に学び、そこに改良を加えられれば、より良い千葉モデルを作ることもできるので、研修会の準備にあたってはｅラーニングも含めて野田委員の助言を仰ぎながら進んで

いるところの情報も取り入れて考えていければと思う。

〇飯笹委員

　親族が病気になった経験から、医療者になる者は多い。がん教育を通して、次世代の医療者を希望する人が出てくればと思っている。

　日常の診療の中で、がん患者や、その家族とお話しするときに医療者の知識とギャップを感じる。少しでもギャップを埋められるように、子供たちに覚えてほしいという願いもある。

　また、実務への負担がないような配慮も医療者側としてはお願いしたい。研修会の受講や資格の取得等が必須となると、参加してくれる医療者が少なくなってしまうのではないか。

〇横手会長

　研修会を労力がかかりすぎるものにしないという点も重要であるので、その点も含めて次回の会議に向けて事務局で消化してもらいたい。

〇野田委員

　研修会の推進だけでなく、がん教育を実際どんな風にやっているか先進事例も含めて委員全員に県外の様子も知ってもらえる機会があればいいと思う。学校の先生向けや外部講師を担う人達向けに、オンラインで勉強会なども企画できるといい。

〇横手会長

　効率的に良いものを、そして実行性のあるものを作ってもらいたい。

　本日の準備された議題は以上で終了する。　　**【議事終了】**